



## 吉田 幸雄 名誉教授 略歴

- 大正14年 8月 9日生
- 昭和26年 3月 京都府立医科大学卒業
- 昭和27年 5月 京都府立医科大学医動物学教室研修員
- 昭和27年 9月 医師免許証
- 昭和28年 3月 京都府立医科大学 医動物学教室 助手
- 昭和31年 6月 医学博士（京都府立医科大学）
- 昭和33年 8月 京都府立医科大学 医動物学教室 講師（非常勤）
- 昭和36年10月 京都府立医科大学 医動物学教室 講師
- 昭和37年 7月 京都府立医科大学 医動物学教室 助教授
- 昭和37年 9月～昭和38年 9月  
アメリカ合衆国チューレン大学留学
- 昭和43年 7月～昭和45年 5月  
京都府立医科大学 中央研究室実験動物部  
門実験動物室主任
- 昭和45年 5月 京都府立医科大学 医動物学教室 教授
- 昭和46年 7月～昭和48年 3月  
京都府立医科大学 学生部長
- 昭和49年 4月～昭和50年 3月  
日本寄生虫学会会長
- 昭和50年 2月～昭和51年12月  
文部省学術審議会委員
- 昭和56年 2月～昭和58年 1月  
文部省学術審議会委員
- 昭和56年 7月～昭和60年 7月  
京都府立医科大学 附属図書館長
- 昭和59年 6月～平成 2年 3月  
文部省大学設置審議会専門委員（大学設置  
分科会）
- 昭和60年 4月～昭和61年12月  
厚生省エイズ調査検討委員会委員（エイズ  
対策専門家会議委員）
- 昭和62年 2月～平成元年 1月  
文部省学術審議会委員（科学研究費分科会）
- 昭和62年 7月～平成 7年 3月  
京都府エイズ対策専門家会議委員
- 昭和63年11月 中華人民共和国四川省医学科学院寄生虫防  
治研究所名誉顧問
- 平成元年 3月 京都府立医科大学 医動物学教室 教授定  
年退職
- 平成元年 4月 京都府立医科大学 名誉教授
- 平成元年 5月 ドイツ寄生虫学会名誉会員
- 平成元年 4月～平成 6年 3月  
京都府衛生公害研究所 所長
- 平成元年 8月～平成 7年 3月  
京都府感染症サーベイランス委員会委員
- 平成元年 8月～平成 7年 3月  
京都府結核サーベイランス委員会委員
- 平成元年 8月～平成 7年 3月  
高浜原子力発電所評価委員会委員長
- 平成 3年 1月～平成 3年12月  
日本熱帯医学会会長
- 平成 6年 4月～平成 7年 3月  
京都府保健環境研究所 所長
- 平成 6年 8月～平成15年 2月  
京都府環境審議会委員
- 平成 7年 4月 日本寄生虫学会名誉会員
- 平成 7年 6月 日本臨床寄生虫学会名誉会員
- 平成10年 8月 第9回国際寄生虫学会 基調講演
- 令和元年11月 日本熱帯医学会名誉会員
- 令和 6年10月 5日逝去 享年 99歳

### 受賞・叙勲

- 昭和37年 4月 日本寄生虫学会第9回小泉賞
- 平成元年 4月 日本寄生虫学会第37回桂田賞
- 平成15年 4月 勲三等瑞宝章

## 吉田幸雄名誉教授を偲んで

京都府立医科大学名誉教授 吉田幸雄先生が令和6年10月5日、虚血性心疾患のため永眠されました。享年99歳でした。先生のご逝去に際し、旧医動物学教室ならびに感染病態学を代表して謹んで哀悼の意を表します。

吉田先生は大正14年に京都市でお生まれになりました。昭和19年に同志社中学をご卒業後、同年に本学予科にご入学されました。当時、医学部は徴兵猶予の恩典があったため、受験者が殺到し競争率は十数倍という非常に難関であったとのこと。中学ご入学後、病気療養のため1年間休学され、愛媛県今治市のご親せき宅にて過ごされました。その間、吉田先生はカメラに熱中し、船釣りや読書に没頭されていたとのこと。このような経験もあってか、昭和27年には同級生数名とともに本学にヨット部を創設されました。以後、ヨットと釣りを生涯の楽しみとされました。

吉田先生は昭和26年3月に本学ご卒業後、同27年5月、本学医動物学教室に入局し、同28年3月、助手に採用されました。その後、講師、助教授を経て同45年5月に医動物学教室の教授に就任され、平成元年3月に定年退職し、同年に名誉教授の称号が授与されました。

その間、大学紛争が終息していない昭和46年に学生部長にご就任され、紛争の收拾に尽力されました。また、昭和56年には附属図書館長にご就任され、2期4年間の在職中に、大学創立110周年記念事業の寄附金をもって視聴覚教育機器の整備や図書館業務のコンピューター化を行うなど近代化に努められました。さらに、平成7年には同窓会組織である学友会の会長に推挙され、大学創立125周年記念事業を推進し、その寄附金を用いて福利厚生施設である会館の建設にご尽力されたことは特筆に値します。

一方で、平成元年には京都府衛生公害研究所（平成6年6月、京都府保健環境研究所に名称変更）の所長にご就任されました。在職中、平成3年には環境放射線監視テレメータ中央監視局を整備するなど、研究所の機能強化に努められました。また、特にライフワークであった衛

生動物や寄生虫などの医動物に関する試験検査、防除指導、調査研究において指導性を発揮し、京都府の公衆衛生の向上に大きく貢献されました。

加えて、教授ご就任後には、国および地方自治体の種々の審議会の委員に委嘱されました。主なものとして、文部省学術審議会委員、文部省大学設置審議会専門委員、厚生省エイズ調査検討委員会委員があり、京都府エイズ対策専門家会議委員、京都府環境審議会委員、高浜原発評価委員会委員長などの委員としても社会に貢献されました。

さらに、吉田先生は助手、講師、助教授として17年間、教授として19年間の長きにわたり、本学医学部学生、大学院生並びに研究生の教育と指導にご尽力されました。また本学以外に、京都府立大学、広島大学、三重大学、愛媛大学、熊本大学、神戸大学、秋田大学、山形大学、新潟大学、岡山大学、滋賀医科大学、高知医科大学、浜松医科大学、大阪市立大学、福井医科大学、関西医科大学、宮崎医科大学など、多数の大学の非常勤講師として授業を担当し、医学教育に貢献されました。

吉田先生は昭和52年に「図説人体寄生虫学」、昭和60年には「医動物学」を著されています。前者は医学生用、後者は技師・看護師のための教科書として広く用いられ、共に版を重ね現在に至っています。このように吉田先生は京都府立医科大学のみに止まらず、長年にわたり、直接あるいは間接に、ひろく我が国の医学教育に貢献したということが出来ます。

吉田先生は、医動物学教室入局以来、寄生虫学、衛生動物学、熱帯医学の研究に従事されました。発表された著書は74編、原著論文・総説論文・指導論文は376編に及びます。また、学会発表は610回を数え、その内、特別講演10数回、シンポジウム30数回、さらに国際会議での発表も50回以上行われました。平成10年には日本で初めて開催された第9回国際寄生虫学会において、基調講演を行い、日本を代表して寄生虫学の歴史的展望を述べられました。

ご研究のご業績としては以下のことが特筆されます。

昭和20年代後半から30年代前半にかけて、当時、国内で深刻であった回虫、鉤虫、鞭虫などの寄生虫症の予防と撲滅方策を求め、各地の農村での野外活動に従事されました。特に、鉤虫に焦点を当て、人間以外には感染しないとされていたズビニ鉤虫とアメリカ鉤虫を動物に感染させることに成功し、これにより人への感染ルートや、感染後の虫体の人体内移行経路を解明するとともに、新しい駆虫法を開発されました。その功績が認められ、昭和37年には日本寄生虫学会において第9回小泉賞を受賞されました。昭和40年代には、研究の範囲を熱帯地方の鉤虫に広げ、世界各地で鉤虫を採集し分類を行い、それまで曖昧であったブラジル鉤虫とセイロン鉤虫の別種説を確立するなど、世界的に鉤虫研究の第一人者と目されるようになりました。

さらに、肺吸虫の研究においても大きな業績を残されました。近畿地方における肺吸虫の流行状況を調査し、ウエステルマン肺吸虫に関しては多くの患者を診断・治療されました。また、大平肺吸虫については京都府、兵庫県、愛知県などに新たな流行地を発見し、ムシヤドリカワザンショウ、ヨシダカワザンショウなど新種の貝を発見し、これが第1中間宿主になっていることを証明し、本虫の生活史の全貌を明らかにされました。加えて、昭和30年から40年代に、ブユ、肝蛭、走査電子顕微鏡による研究にも従事されました。日本国内におけるブユの種類、形態、生態、駆除法に関する広範な研究を行い、大山で新種のブユを発見し、ブユの実験室内飼育に我が国で初めて成功されました。また、肝蛭についても多くの症例を経験し、新しい感染経路や新しい駆虫薬について発表されました。

昭和40年代後半には、ニューモシスチス・カリニ肺炎（後にニューモシスチス肺炎と名称変更）とその病原体に関する研究を開始されました。当時、この肺炎は先天性免疫不全の小児や白血病患者、腎臓移植患者に見られ始めた病気でしたが、本格的な基礎研究はほとんど進んでいませんでした。吉田先生はこの疾患の重要

性に早くから注目し、昭和47年より教室を挙げて研究を開始し、昭和56年には専門書「ニューモシスチス・カリニ肺炎」および「ニューモシスチス・カリニ肺炎文献目録」を発刊され、本症研究の指針を示されました。この研究はその後、AIDSの出現により、ニューモシスチス・カリニ肺炎がAIDSの致命的な合併症として注目される中、吉田先生の研究成果が国際的にも高く評価されました。その功績により、平成元年には日本寄生虫学会第37回桂田賞を受賞されています。

吉田先生は多くの学会に所属し活動を続けてこられました。中でも日本寄生虫学会において、評議員として40年、幹事として15年、西日本支部長として6年奉職し、昭和49年には会長となられ、平成7年には名誉会員に推挙されました。その間、同学会の教育委員、用語委員、小泉賞選考委員、桂田賞選考委員として同学会の発展に寄与されました。その他、日本熱帯医学会会長、日本臨床寄生虫学会名誉会員、日本衛生動物学会評議員並びに幹事、日本感染症学会中日本支部評議員など多くの学会の役員をお務めになり、それぞれの学会の発展に貢献されました。また、米国留学を含む22回の外遊を経て、世界の寄生虫学者との交流を深められました。国際協力事業団の事業にも積極的に協力し、グアテマラやアフリカに数年間にわたって数名の教室員を派遣するとともに、グアテマラ、中華人民共和国、アメリカ合衆国より留学生を受け入れ指導されました。これらの功績により、昭和61年に中華人民共和国重慶医科大学から名誉教授、昭和63年には四川省医学科学院寄生虫病防治研究所から名誉顧問、平成2年には南京医学院から客員教授の称号が授与され、平成元年にはドイツ連邦共和国寄生虫学会から名誉会員の称号が授与されています。

私は平成24年に医動物学教室を前身として新設された感染病態学教室の教員として本学に赴任した後に吉田先生とお話しする機会を得ました。着任後まもなくご自宅にお招きいただき、先生の教授時代の思い出を聞かせていただきました。吉田先生のお話に引き込まれ、とても楽しいひと時でしたが、ご自宅を辞して鴨川沿い

を歩いている際に、教授としてのあり方を教えていただいたのだなと感激するとともに身が引き締まる思いであったことを覚えています。

このように吉田幸雄先生は、ご自身の専門とする寄生虫学、衛生動物学および熱帯医学を通じ本学ご卒業以来、その全生涯を教育、研究、社会の発展に挺身したといっても過言ではなく、そのご功績は極めて顕著であり、平成15年4月には勲三等瑞宝章を受章されておられま

す。さらに、その誠実な人格と指導力、そして数々のご功績は私たちの模範となるものです。吉田先生、どうぞ安らかにお眠りください。今後は天から京都府立医科大学を見守りください。ご冥福をお祈り申し上げます。

京都府立医科大学感染症学教室

中屋隆明

## 吉田幸雄先生との思い出

私（山田）は昭和51年に他大学より旧医動物学教室に助手として入局をいたしました。入局後は主にニューモシス肺炎の基礎的・臨床的研究などに10年間ほど携わりました。その当時、吉田先生はお酒がお好きで、またたばこもお吸いになっていましたが、糖尿病が見つかったからはお酒やたばこも殆どお止めになりました。そして健康のために毎日自宅より鴨川縁を大学まで徒歩で通われていました。そのためかその後は元気になりました。

ヨット部を創設された吉田先生は、福井県の若狭マリーナにヨットを停留させ、スタッフと頻りに海を航行し、またエンジンも付けて自分で操縦されてもいました。ご本人から聞いたと思うのですが、1級免許（航海士か？）をお持ちと伺っております。海釣りも大好きでした。そのためか夏には私にもお声かけいただき、颯爽と海釣りに連れて行ってもらいました。また京都の伊根にスタッフの方々とご一緒泊まりがけで釣りに行ったことが思い出されます。

ヨットが走っている間や止めて海釣りなどをしますと私は海釣りを楽める事は少なく、必ず船酔いのため気分が悪くなったのを覚えております。しかし我慢して多くの魚を釣ることが

出来たことを覚えており楽しかったです。その後、釣った魚の内臓や鱗を取った後に先生の指導の下、鯛めしを作りました。先生からは骨を口から吐き出しながら注意深く食べるのがコツだと説教されたことが思い出されます。またお釜を持参して岸から沖へ出て海水でお米を洗い砂が混入して怒られた事を覚えています。てっきりこれまで先生は愛媛県出身だと思っておりましたが、今回、京都生まれと知り、びっくりしている次第です。記録によると、先生は中学時代、静養のため、愛媛県の今治におられ、しばしば釣り三昧をされたこと知り、納得した次第です。

私も73歳になりましたが、吉田先生から自分の年齢に較べると70代は子どもだといつも言われてきました。

最後に、吉田先生、長い間本当にご指導を賜り、誠に有り難うございました。今の自分があるのも先生のおかげと感謝しております。先生の安らかなご冥福をお祈りし、筆を置きます。

京都府立医科大学感染症学教室、

医動物学教室

山田 稔